ほない歴史通信
第９２号
2019(令和元年).9.1

「袋田の滝」、その昭和史の一端を探る（続）

―昭和二十五年、「茨城百景」県民投票を通して―

本誌第八九号では、袋田の滝の知名度を高め観光の中心に育てようとの先人たちの取り組みが、昭和二年（一九二七）の投票行動を契機に大きく盛り上がったことを紹介した。同様の動きは、第二次大戦が終わって間もない二十五年にもみられた。茨城県といはらき新聞社が主催した「茨城百景」の選定である。

昭和二十二年四月の茨城県知事選挙で初の民選知事になった友末洋治は、「平和茨城建設事業」を軸にして県土の復興に専念するが、その一環として立案されたのが「茨城百景」の選定であった。準備会の席上で、友末はそのねらいを述べている。「県は観光資源を多くもつているがこれを誇り得る状況になつていないのは遺憾である、これがため茨城百景を選定して宣伝施策を充実し県内外に呼びかけて観光誘致はもちろん郷土の各種重要物資源等を開発する意図である」、と（昭和二十四年十二月十六日付「いはらき」新聞、以下紙名は略）。百景の選定については、当初は茨城県観光審議会の審議を経て決めることになっていたが、「県民の下から盛り上つた総意の表現こそ最も正しく、最も明朗にして、而かも最も民主的なる唯一の方法というべきであろう」との考え方から「県民人気投票」を実施することになった（昭和二十五年三月十七日付）。投票は、三月十六日から四月十六日までの一か月間である。

主催者でもある「いはらき」新聞は、「早くも県下各地の観光地から連日多数の投票があり、係は整理に忙殺されている、とくに地元市町村をはじめ観光団体、婦人会、青年団、商工会など団体を動員して観光地指定を獲得しようとの熱意が投票に現われ、日とともに白熱的投票戦が展開されている」、と報じた（昭和二十五年三月二十四日付）。「観光はまず宣伝　各地の人気投票白熱化」（同年三月三十日付）との見出しが示すように、県内各地の取り組みは次第に熱を帯び、観光地ごとの票の動静が「観光茨城百景人気投票成績」として連日紙面を賑わせた。

三一五か所の観光地が競い合ったこの「投票戦」の最終結果は、四月十九日付紙面で発表された。袋田の滝は二万一六九八票を得て第一三番目に入り、他に大子地域では如信上人墓、大子の史蹟、男体山等が一万票以上の票を集めた。この投票結果と選定専門委員会委員の実地踏査の結果を併せて茨城百景が選定されたが、それは五月十日付「茨城県報」で正式に告示された。大子地域では、袋田温泉と四度の滝、奥久慈渓谷、八溝山、如信上人の墓、大子の史蹟、男体山と湯沢温泉、以上六か所が選ばれている。

投票によって茨城百景を選定するこの催しは、その後の茨城県及び県内各市町村の観光振興の在り方や内容に大きな影響を与えた。大子地域の各町村も例外ではない。とくに袋田村では、昭和二年に日本二十五勝の一つに選定されていたことも相俟って観光地としての整備にいよいよ拍車がかかっていく。その取り組みは、「二十三年〝袋田観光協会〟の発足により年中行事として観光祭を行い又温泉ホテルと協力観光施設の充実、サービスに着々その実績をあげ駅の改装、ラジオ施設、バスの連絡、ホテル周辺の自然科学園、ラジオの放送、観光橋の新設、滝登山道計画、観光道路と桜の植樹など絶えず努力が続けられている」（昭和二十五年七月十五日付）と紹介された。観光の核となる袋田の滝と温泉を相互に結び付けながら、新たに関連する諸施設の整備に注力している様子が読み取れよう。

（齋藤典生）

夏の日の記憶

赤津康明

北緯三十六度四十八分。

茨城県の最北に位置する北茨城市の郊外で、私は生まれ育った。昭和三十四年（一九五九）、世の中がいわゆる岩戸景気に沸くなか、皇太子のご成婚があり、テレビや自動車が急速に普及し、週間少年漫画雑誌が続々と創刊された、にぎやかな時代。実家の周辺は、東には太平洋が迫り、西を向けば山々が連なるのどかな田園地帯であった。小学校の校歌の歌い出しは、「しお風そよぐ中郷の～」であり、中学校のそれは「阿武隈の山並をみて～」である。幼少期からハイティーンにかけての故郷の思い出は数知れないが、特に印象が強いのは、夏の日の記憶である。磯原海岸をはじめとした砂浜で磯遊びに興じながら、大北川では鮎をバケツ一杯に釣った。山深い花園神社近くの渓流は、イワナやヤマメの宝庫だった。いつでも夏は、あっという間に過ぎていったが、まぶしいほどの楽しい記憶は、今も鮮明である。

北緯三十六度四十六分。

大子町の夏は、今年は殊更に暑い。陽光は容赦なく降りそそぎ、屋外を歩けば汗が途切れなく流れ落ちる。ニュースは、県内の（時として全国の）最高気温と報じている。しかし、不思議にも、灼熱の空気のなかで思い出すのは、楽しかった故郷の夏である。清流や名瀑や霊峰を包む大自然に身を置いていると、体内に刻印された記憶装置が生き生きと動き出すのを実感する。清流の女王・鮎が踊る久慈川の流れ、岩に砕ける波を想起させる袋田の滝の飛沫、彼方にある未知の地を夢想した山々から続く八溝山地。これらは、私のなかで新たな故郷のシンボルとなりつつある。

考えてみると、北茨城と大子の両地域には、幾つかの共通点があるような気もする。岡倉天心や野口雨情といった文人の香りが残る芸術の地と、西行や徳富蘇峰が作品を詠んだ山紫水明の地。石炭産業からの転換を図りながら、活力あるまちづくりを進める地と、地場産業の農林業を守りつつ、新たな展開を図っている地。隣接する他県を含む自治体との間で、さまざまな連携を構築している点も、両地域の類似した特徴であろう。

平成三十一年四月。

間もなく新元号に改まろうとしていた春に、私は約三〇年勤務した職場を定年で終え、現在の職に就いた。まだ何者でもなかった少年時代の夏から数えると、かなりの歳月が経過した。作家・開高健の表現を借りれば、たくさんの水が橋の下を流れた、ことになる。進学のため実家を離れてから長い時間を経て、私は故郷とほぼ同緯度にあるこの町にやってきたのである。

先に母校の校歌を紹介したが、著名な作曲家である古関裕而がメロディーをつけた袋田小学校の校歌の歌い出しは、「朝日に映える久慈川の～」である。校内に建つ歌碑に彫り込まれた三番の歌詞には、「月居山の空青く～」とある。久慈川の豊かで清らかな水は、ゆったりと流れ下り、やがては太平洋に届く。月居山から東に向いた遠い先には、長い水平線が広がる。そしてそこは、私を育んでくれた豊穣なる海である。私は、身体に染みこんだ潮の香りを想いながら、この豊かで美しい大子の地で、新たなる一歩を踏み出した。この先、どんな出来事が待っているか、今のところ知るよしもない。ただ、ひとつ思うのは、いま自分が置かれた場所で、何事にも染まっていなかったピュアな精神を再び思い出しながら、前へ進んでいこうということである。

この稿を書いている部屋の窓からは、真夏の象徴である入道雲が、層をなすのが見える。私は、これまでそうであったように、これからも、四季を通じた日々の生活を営みながら、新たな夏の記憶を胸に刻んでいくだろう。

今日も、暑い一日になりそうだ。

（大子町副町長）

教員かけ出しの頃の思い出（下）

―最初の赴任地依上中学校での日々―

高根信和

春は出会いと別れの季節である。別れといえば、就職先が決まった卒業生を常陸大子駅から歓送する行事があった。大子町内の各中学校の卒業生が皆一斉に上京するのがいつ頃から始まったのかは不明だが、父兄や教職員が駅前に集合し、大子中学校のブラスバンドにのせて送り出すのが恒例となっていた。希望に満ちた卒業生や別れが辛い父兄達を見ていると、そして発車のベルが鳴り列車が動き出すと私自身にも別れの辛さが込み上げてきた。

本校での就職活動は、前年の東京方面への遠足時にすでに始まっていた。当時は、中学校卒業生が「金の卵」と称され、もてはやされる時代であった。中小企業の社長達は遠足での立ち寄り先をキャッチしていて、生徒に会うと父母や兄弟姉妹への土産物を渡すのが慣例であった。社長の口から働いている兄や姉の名前が出ると、生徒たちはそこに就職先を決めてしまうのだと先輩教員が言っていたのを思い出す。

春の大子は山菜の本場である。ある日曜日に下宿でゴロゴロしていると、三人の女子生徒がカゴを背負ってやってきた。今から山菜を採りに行こうと言う。南山の山麓に向かって歩く。疲れて休んでいると、生徒は早くもカゴ一杯採って下りてきた。山菜は束ねて売る。とくにゼンマイは、ゆでて乾燥させると高値で売れると話していた。山の子は働き者で、中学生はもう一人前である。

夏は釣りの季節。鮎の解禁は七月で、理科の教員には漁業組合から鮎釣りの鑑札が与えられたが、素人なので一度も利用したことはなかった。久慈川の支流押川では、雑魚がたくさん獲れた。生徒達に釣り針を頼まれて大子の町中へ買いに行ったことがある。殿様気分で川虫を生徒に付けてもらい、木橋の上から釣り針をたらすとバケツいっぱい獲れた。川魚は貴重なタンパク源となった。

秋は収穫の季節。美術の教科も担当していたので、バケツに水を入れさせて毎週女倉山に写生に出掛けた。生徒達は写生は二の次で、きのこ採りに一生懸命だった。イッポンシメジ、ホウキタケ、チチタケ等々、種類も量も豊富だった。ただし、後から採りに来た人のためにきのこを残しておくという〝山の仁義〟は忘れなかった。土曜日には常陸太田市へ帰省することを生徒達は知っていたので、お土産代わりにいつもきのこを届けてくれた。

大子の冬は厳しい。陽が落ちるとさらに冷え込んだ。ある日、グランドでバスケットボールの指導をしていると霜柱が立つのを実際に見届けたことがあった。また、下宿に帰らず、職員室の石炭ストーブをがんがん燃やして校長室で高梨、徳蔵、木村の各先生方とマージャンに興じ、インスタントラーメンをかじり、安価なウイスキーを飲みながら朝まで過ごしたこともしばしば。家庭科室で寝ていると校長に起こされ、昨夜は四人で宿直かと皮肉られ、苦笑したこともあった。

中学校教員としての三年間を締めくくる時が来た。県立太田一高への転出が決まり、昭和三十九年（一九六四）三月、依上中学校（現西中学校）での離任式に臨んだ。綿引ＰＴＡ会長、塚田教頭ら同僚教員、そして全校生徒一人一人からの見送りを受けた。これも自分の運命だ、心を鬼にして別れなければならない、当時の率直な心境であった。僅か三年間の在任であったが、五五年も過ぎた今日でも離任式の光景はありありと目に浮かんでくる。

山と川のある、自然環境に恵まれたまち大子が教師としての最初の赴任地であったこと、そこで人情味豊かな数多くの人々に接するなかで人生の基を築けたこと、まさに感謝の気持ちでいっぱいである。八〇年という私のこれまでの人生を振り返った時、大子町は決して忘れることのできないところである。（水戸市在住）

大子町の新発見城郭その一・立神古城について

五十嵐雄大

大子町小生瀬立神地区に、古城と呼ばれる城郭遺跡があります。江戸時代に描かれた加藤寛斎の「常陸国北郡里程間数之記」に、月居山周辺の絵図があり、そこに「古城」と記載されています。そこには、野内氏の居館跡があったと記されています。この記述から、立神に城郭があったことが知られていましたが、その実際の位置については、長い間不明のままでした。今回、立神古城の跡地を確認することができたので、紹介します。

城郭は、生瀬富士がある山塊が袋田の滝に注ぐ小川の蛇行によって削られた台地に位置しています。

遺構の周囲には、高さ一メートルの土塁がめぐっています。また、東側に高さ三メートルの切岸があり、平地城館です。堀跡は見られません。現地の古老に話を聞いたところ、かつては西側の山（立神山）にも遺構があったと話していましたが、現在ここはスキー場建設のための大幅な改変で煙滅しています。この西側の山のところには、「古城」という地名が残っているため、こちらが立神古城であった可能性もあります。

図１．立神古城の場所
（国土地理院地図より、著者加筆修正）

野内氏の居館が立神古城にあったとの伝承から考えると、野内氏の居城は、永正年間に佐竹氏が番人を置いたことで有名な月居城と別の場所にあったのではないかと思われます。さて真実は如何に。

（茨城城郭研究会）

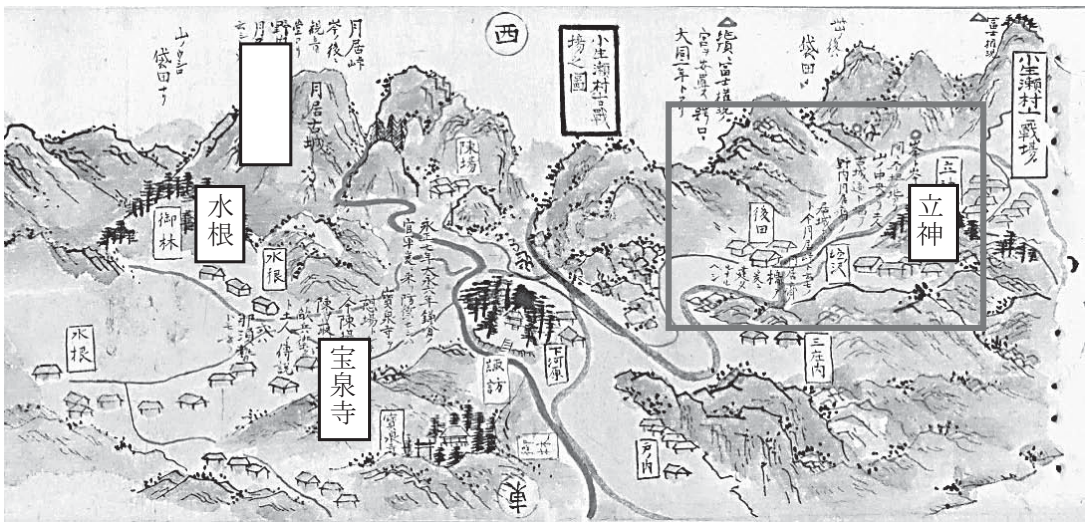

図２．加藤寛斎「常陸国北郡里程間数之記」
（国立国会図書館蔵）
枠線部は、古城坪の説明
（右の四角内に説明文を記した）

峯ト峯トノ間ニ平坦ノ地アリ、山ノ中央ナリ、土人古城迹ト唱フ、野内月居齋ノ居城ナリト、今月居峠ト云モノ、月居齋櫓ヲ爰ニ建タルナルヘシ、

小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世（三）

本誌第八九号・九〇号で紹介した小生瀬宝泉寺の扉書を引き続き読み解いていきます。自分の名が書かれた墨書きとの一六年ぶりの再会を詠んだ歌とともに、次の有名な歌が記されています。

〔原文〕
あひみての後のこころにくらふれは
むかしはものをおもはさりけり

〔現代語訳〕
あなたと逢瀬を遂げた後のこの思い悩む心に比べれば、あなたと契りを結ぶ前の物思いは大したものではなかったのだな。

これは平安時代の歌人藤原敦忠が詠んだ歌で、小倉百人一首にも収録されています。もともとは、意中の相手と関係を持ってしまったが故に思い悩む恋心を詠った歌でした。通賢は、思わぬ昔の自分との再会によってよりはっきりと思い出された昔への感傷を、有名な歌に重ね合わせて表現しているのです。

このように和歌を巧みに操る藤原通賢とは何者なのでしょうか。系図や『新編常陸国誌』等で確認すると、鷲子（現常陸大宮市）に拠点を置く鳥子江戸氏の一族であったことが確認されます。

鳥子江戸氏は水戸城主江戸氏から分かれた一族で、江戸氏本家が佐竹氏と対立を繰り返す中で、早くから佐竹氏一族に付きしたがっていたことが知られています。小生瀬宝泉寺の永正七年（一五一〇）の墨書が書かれた頃は、江戸氏本家と佐竹氏とが対立していた時期でしたが、本誌第八九号でも見た通り、藤原（江戸）通賢等は野口氏とともに佐竹氏に従軍しています。また、現在でも常陸大宮市鷲子には、鳥子江戸氏の本拠である河内城跡が残っています。大永六年（一五二六）の和歌に、「えとの河内め」とあるのは、本拠地河内城を念頭に置いた表現なのでしょう。鳥子江戸氏を詳細に調べてみると、和歌を嗜む人物は通賢一人ではなかったことが判明します。当時の学問・文芸の第一人者である公家・三条西実隆の日記には、延徳元年（一四八九）、鳥子江戸氏初代通治の子真純（隠岐守、蓮阿）が、京都歌壇の中心人物飛鳥井雅親の邸宅で歌会を主催したことが書かれています。その歌会には、三条西実隆や猪苗代兼載などの当代一流の歌人たちが名を連ねています。永正十七年（一五二〇）の記事には京都から常陸へ下向するための暇乞いに真純が伺ったこと、大永七年（一五二七）には六五歳で熊野詣に伴って上洛したことが書かれています。真純は、和歌を得意とし、京都と常陸国を行き来する人物であったことがわかります。

河内城（常陸大宮市鷲子）

時代が下りますが、天文二十一年（一五五二）の鷲子山上神社再興の棟札に名前が見える江戸通直（右近大夫）も、歌を嗜む人物でした。年は不明ですが、佐竹氏の城下町太田で通直主催の連歌の会を開いたり（「石苔」）、連歌師として有名な猪苗代長珊と和歌門弟契約を結んだりしています（「猪苗代家関係文書」）。

このように、鳥子江戸氏は文化人的素養のある人物を輩出する一族でした。そうした一族出身の藤原（江戸）通賢も日常的に歌を楽しむ環境にあったと思われます。そのため、戦場にあっても風流を解する心を忘れず、自分の気持ちを歌で表現することができたのでしょう。（続く）

（藤井達也）

私のマラソン人生（一）

小室健二

昭和三十年（一九五五）三月三十一日、一町八か村が合併して新生大子町が誕生しました。私の地元下小川村は大子町と山方町に分村合併をしました。大子町には、西金地区、盛金地区の一部（大内野、上原、黒丸）と北富田の一部が合併しました。

当時私は下小川中学校の一年生でした。合併に伴い、全国でも珍しい下小川中学校組合立下小川中学校という名称になりました。この頃、下小川地区には若い人が多く、青年会の活動が盛んでした。町村合併を機に昭和三十年四月には大子町連合青年会が誕生し、初代会長に石井登氏が就任しました。連合青年会の行事として翌三十一年一月三日、大子町内九地区を廻る青年会対抗第一回保内郷一周駅伝競走大会が行われました。西金駅前をスタートして上小川駅前から割山、月居を登り、生瀬地区を走り抜けて宮川から黒沢、大金沢を登り、佐原、依上を走り大子駅前がゴールの、十区間五〇キロにも及ぶ大きな駅伝でした。

時を同じくして、私が通う下小川中学校でも、学区内を十区間で走る七クラス対抗の駅伝競走大会を行っていました。西金駅前をスタートして湯沢に入り、もどって盛金、家和楽、下小川駅、岡平、西金、川下から下小川中学校にゴールインするコースでした。私も選手として走り、区間賞を取れる走りをしていました。

下小川地区は他より小さい地区で、青年会員も少なくて選手がなかなか揃わないようでした。青年会長さんから選手として走ってほしいと言われて、走るのが嫌いでなかった私は引き受けることにしました。その時私は中学二年生で、下野宮の万年橋から町付まで走りました。当時高校生だった兄が自転車で伴奏してくれたこともあって、区間賞をいただくことが出来ました。当時、茨城陸上競技協会理事長で、青森～東京間都道県対抗駅伝の茨城県チームの総監督もしておられた川又廣先生が、第一回保内郷一周駅伝競走大会から水郡線で西金駅まで来られました。先生は、審判車に乗車し、走る選手たちを応援されました。閉会式では講評までしていただきました。その先生に励まされ、区間賞をいただけたことから私のマラソン人生が始まりました。

その後、保内郷一周駅伝競走大会は正月の恒例行事になり、各地区では十二月になると、仕事が終わった夜の時間に青年会員が集まって練習をしました。女性の方は夕食を作ったり、青年会の役員さんは寄付を集めに歩いたりと、地域の若い人の交流の場になっていました。その中から結婚する人も何組か生まれました。青年の意気は高まり、大子町の大会から久慈郡大会、そして茨城県青年大会を勝ち抜いて全国青年大会で活躍する選手も多くなりました。（続く）

（大子町在住）

第１８回青森～東京間都道県対抗駅伝
岩手県庁前にゴールインする筆者（昭和４３年）

生瀬の乱の発生年代の考証について

皆川敦史

生瀬の乱は、今から約四百年前、江戸時代の初期に小生瀬村で起きたとされる「一村皆殺し」の伝承が残る騒乱である。当時の文献には全く記録がなかったが、それから約二百年後になって、水戸藩の学者であった高倉逸斎の『探旧考証』や水戸藩士加藤寛斎の『常陸国北郡里程間数之記』の中で、役人からの情報、現地調査、地元の伝承を収集したものが書き記されたことにより、事件が知られるようになったものである。

高倉逸斎は、百姓がかねて年貢のことについて不満を持ち、徒党を組み、出張して来る代官手代を殺そうと謀議した「百姓一揆」とし、発生年代については慶長十四年（一六〇九）、元和三年（一六一七）、同七年（一六二一）が考えられるとした。

加藤寛斎の説は、こうである。代官所から役人と称する者が来たので小生瀬村百姓は年貢を完納した。ところが、後から正吏と称する者が現れ、年貢を督促したところ、百姓は既に納入済みの旨申し立てたが、聞き入れられなかったので、これを偽役人と判断し、殺してしまった。寛斎はこれを「錯誤による偶発的事件」とし、発生年代については慶長七年（一六〇二）とした（小澤圀彦氏「ふるさと歴史講座資料」参照）。いずれの説も、事件は十月十日に起こり、旧武田家臣から水戸藩家老となった芦沢伊賀守により鎮圧されたとされている。

まず、水戸藩の成立前後の主な動きを追っていきたい。

○慶長七年（一六〇二）五月、佐竹氏が秋田の地に移封される。

○同年十一月、戸沢氏領を除く佐竹氏領の後に徳川家康の五男武田信吉が下総国佐倉から入封する。那珂・茨城・久慈・鹿島・行方郡に十五万石を領した。

○同八年（一六〇三）、信吉が入封まもなく二一歳で亡くなると、家康の十男徳川頼宣（頼将）が二歳で領主となった。このとき五万石増やされて二〇万石となり、さらに翌九年（一六〇四）に久慈郡保内と下野国那須郡武茂に五万石を加増され、二五万石となる。

○同十四年十二月、頼宣が駿河国に移ると、家康の十一男徳川頼房が七歳で下妻一〇万石から入封する。表高二五万石の水戸藩の成立である。

○元和五年（一六一九）十月、頼房一七歳で初めて就藩する。

これらを踏まえて、それぞれの説を検証してみよう。

慶長七年説は、佐竹氏の移封時期と重なり、年貢の持ち去りか、または佐竹氏の恩顧を受けていた者による新たな支配者への反抗とも考えられる。前者は、加藤寛斎の記述に一致する。ただしこの時期は、武田信吉は入封前で、かつ保内は支配地に含まれていないため、直接徳川氏の命により鎮圧されたことになる。

慶長十四年説は、幼少のため未就藩であるが頼宣の統治期に当たる。頼房はまだ入封前なので、領主の入れ替わりによる混乱とは考えられないので、苛政に対する百姓一揆とすれば、頼宣の家老芦沢伊賀守の鎮圧として、高倉逸斎の記述に一致する。

最後に、元和三年、同七年説は、初代水戸藩主頼房の統治期に当たり、引き続き芦沢伊賀守が家老を務めており、前記と同じように考えられる。ただし、頼房が江戸から命令したか、就藩後に直接命令したかの違いがある。なお、佐竹氏の移封時期から年を経ているので、その威風を慕った反抗とは考えにくい。

いずれも仮説が成り立つが、やはり発生年代は特定できない。戦国時代の余燼が消えない中、領主がまだ幼少であったため、領内の安定化のために徹底的に鎮圧し、あえて負の記録を残さなかったではないかと推察するものである。

（大子町役場）

大子の今昔
写　真　帳
No.1

旧黒沢小学校校舎・正門

木造校舎から鉄筋コンクリート校舎へ
（昭和５８年３月３０日完成）
平成３１年３月閉校
（黒沢小学校『閉校記念誌』より）

昔々に撮られた写真。ファインダー越しに写る風景に昔の人は何を思ったのでしょうか？レンズを通して、今と昔の大子の姿を比べてみます。

「ほない歴史通信」では、皆さまがお持ちの古い写真を募集しています。「大子の今昔写真帳」に掲載してもよい写真がございましたら、中央公民館の生涯学習担当までお申し出ください。　（大金真理子）

連絡先　０２９５（７２）１１４８

昭和三十年頃

昭和三十年頃

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　齋藤　典生（大子町歴史資料調査研究員）
井上　和司（大子町歴史資料調査研究員）
藤井　達也（大子町歴史資料調査研究員）
藤田　貴則（大子町教育委員会事務局）
大金　真理子（大子町教育委員会事務局）
発　行　大子町教育委員会
久慈郡大子町大字池田２６６９番地